The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	相互行為のリソースとしての修復 : 日本語母語話者と非母語話者の接触場面における会話の分析から
Author(s)	義永, 美央子
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44186
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【2】

氏　　名	義永（大平）美央子（よしなが おおひら みおこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　17248　号
学位授与年月日	平成14年7月8日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	**相互行為のリソースとしての修復－日本語母語話者と非母語話者の接触場面における会話の分析から－**
論文審査委員	（主査） 教　授　津田　葵 （副査） 教　授　西口　光一　　助教授　山下　仁

論文内容の要旨

本論文は、接触場面での会話が協働的に構築されるプロセスを、特に修復と呼ばれる言語実践に注目しながら微視的に記述するものである。申請者はこれまで、接触場面研究の中でも特に指示的意味の伝達促進という側面を中心とした修復の分析を行ってきた。しかし、修復は真空の中で固定された意味を伝えるために行われるわけではない。本論文では、修復が埋め込まれているコンテクスト、さらに修復の遂行によって構築されるコンテクストを相互行為の具体的な流れの中で詳細に分析することによって、社会的相互行為の一環としての修復をより深く検討することを目指している。

本論文は全7章で構成されており、第1章で序論として問題の所在を述べた後、第2章では先行研究を概観し、研究の枠組みを提示した。本論文では Schegloff（1992）の定義に従い、修復を「何らかの『問題』が生じたときに用いられ、その解決を志向することによって相互行為の適切な進行を維持する『自動復元装置』」とみなしている。また修復は一般的に、問題源となる発話の産出・修復の開始・実際の修復、という過程を経るが、修復を開始するのが問題源の発話の産出者か、それともそれ以外の人物かで自己開始と他者開始に分類される。また同じように、実際の修復を誰がするかによっても自己修復と他者修復に二分される。

これまで接触場面における修復の問題は、主として第二言語習得研究の枠内で研究されてきた。しかしこれまでの研究では、習得のリソースという側面に注目が集まるあまり、修復の問題は「誤りの訂正」「指示的意味の効果的な伝達」という側面に矮小化されてきたきらいがある。先の定義でいう「問題」とは、発話の形式的な誤りや、発話意図および命題内容のコード化とその解読のみを扱うものではない。発話の状況的適切さ、あるいは参与者間の認識のずれなど、さまざまな事象が問題の原因となりうるのである。したがって修復とは、参与者の間主観性を増大させ、相互行為を首尾よく達成させるためのリソースの一つと位置づけられる。また、会話分析的アプローチによる修復の研究は、修復には独自に組織化されたシステムがあることを示している。したがって、修復が遂行できること自体がある種の能力の現れであるとみることもできる。

このような視座にたって修復を研究するための理論的枠組みとして、本論文は上述の会話分析、および、協働的構築を採用した。協働的構築は、「形式、解釈、スタンス、行為、活動、アイデンティティ、組織、技術、イデオロギー、感情その他の文化的に意味のあるリアリティの協同的な創造（Jacoby and Ochs 1995：171）」と定義されてい

る。協働的構築に関心を有する研究者たちは、相互行為の開始前から固定的に存在する規則や慣習、社会的アイデンティティではなく、相互行為の中で言語の意味や参与者のアイデンティティや関係性、さらには社会や文化そのものが構成されている過程に注目している。会話分析は、学際的な概念である協働的構築のルーツの一つであると同時に、会話における修復の問題に初めて取り組んだ研究アプローチでもある。社会学、特にエスノメソドロジーの影響を強く受けた会話分析では、言語的相互行為の一典型である会話の中で、ある様式でことばを用いることによって相互行為がいかに組織化されていくのか、その手続きや方法の発見と記述を目指していた。また会話分析では会話が埋め込まれているコンテクストを非常に重視し、やりとりの連鎖の中で発話を通じて達成される行為の分析に焦点があてられる。

続く第3章は、方法論の検討である。本論文では、外国人日本語非母語話者（以下、NNS）による日本人日本語母語話者（以下、NS）へのインタビュー（約12時間分）をデータとした。一般に会話分析研究では、特に目的が設定されているわけではない自然な会話を分析の対象としている。しかし近年になって、法廷や教室といった、状況的に何らかの目的が志向され、発話連鎖のあり方がある程度定まっている制度的談話の分析も行われるようになってきた。本論文がデータとしたインタビューは、話題や役割（インタビュアーとそれに答える人）があらかじめ定められているものの、それらの決定事項が必ずしも遵守されるわけではなく、会話の進行に応じて話題や役割分担の変更が可能であるという点で、自然談話と制度的談話の中間的性質を有するものといえる。インタビューには、NS 11名、NNS 8名の協力をいただいた。インタビューは NNS の興味・関心に基づき、「日本人の結婚観」「日本の若者」を主な話題とした。インタビューの過程は録音・録画（録画は調査協力者の許可が得られた場合のみ）し、それらの記録をもとに文字化資料を作成、分析した。分析は Pomerantz and Fehr（1997）に準拠し、1）シークエンスの抽出、2）シークエンスにおける行為の特定、3）話し手による行為のパッケージ方法の考察、4）発話の順番取りおよびそのタイミングの考察、5）行為の達成によって示唆される参与者のアイデンティティ、役割、関係性の考察、の順に行った。

以下、第4章から第6章では実際の会話データの分析を行っている。

第4章は、問題となる発話の産出者本人によって開始された修復、すなわち自己開始修復の問題を扱った。自己開始修復では、ある発話が有する何らかの問題が、自己開始によって顕在化される。自己開始の方法としては、1）ポーズ、2）音声的表示、3）発話の中断、4）フィラー、5）各種の談話標識、6）問題性への明示的コメントの6種類が観察された。また自己開始によって顕在化された問題は、同一の参与者によって修復される（自己開始自己修復）場合と、対話者によって修復される場合（自己開始他者修復）とがある。また、自己開始自己修復は参与者のいずれか一方のみで完結する行為のようにみえるが、その開始と終了が対話者を志向しながら行われる点、また自己開始自己修復に必要なフロアを保持するには対話者の承認が必要である点において、自己開始自己修復の達成に対話者も貢献していることが明らかになった。一方自己開始他者修復の場合には、同じ方法による自己開始が参与者のいずれによるものかで異なる他者修復の方法を伴うことが示された。つまり、同様の行為が実践者の属性によって異なった機能を担うものとして構築されていたのである。

第5章では、問題となる発話の受け手によって開始された修復（他者開始修復）を分析した。他者開始修復は問題の顕在化とその解決を通じ、第二言語習得のためのリソースとして、また間主観性を増大させるリソースとして、大いに機能していた。さらに、他者開始という行為自体が協働的に達成されることも示された。その一方で、他者開始、すなわち相手の発話の問題の指摘はポライトネスの原則に背く行為であり、フェイスの侵害を緩和するための種々のストラテジーが観察された。ただし、修復シークエンスそのものがポライトネス・ストラテジーとして機能する例や、修復が埋め込まれた状況によってはより明示的・直接的な他者開始が遂行される例も観察された。

第4章・第5章の分析が、修復という活動それ自体の達成プロセスと、それに影響を与えるコンテクストの考察であるとすれば、逆に第6章の議論の中心となるのは、修復の達成によって構築されるコンテクストである。本論文では、コンテクストの中でも特に社会的アイデンティティとしての「日本人性」「外国人性」に着目した。ここでいうアイデンティティとは、一般に考えられているような、静的・固定的なものではない。参与者はさまざまな属性を担いながら相互行為に参加するが、その中で特に「日本人であること」「外国人であること」が前景化されているのが接触場面会話であるといえるだろう。しかし、接触場面性は会話が開始される前から所与の前提として定められてい

るわけではない。どの属性が前景化されるかは、刻一刻と動的に変化する相互行為の具体的なあり方に依存しており、修復という装置も、日本人性・外国人性の構築に重要な役割を担っている。一方、修復は参与者の役割関係の逆転や日本人性・外国人性以外のアイデンティティの前景化、さらには常識的なカテゴリー化に対する異議申し立てのために機能する場合もあり、アイデンティティの構築とともに、アイデンティティの再構築にも貢献している。これにより、参与者は自分が属する社会の規範や常識に基づいて言語的相互行為を行うとともに、言語行為の遂行を通じて主体的に自らのアイデンティティを編成しうることが示された。

第７章では、結論として論文全体を総括した。本論文の分析により、接触場面会話における修復は、主として間主観性の増大を志向して行われる言語実践であること、言語のみならず、非言語・パラ言語的要素をも含めて巧みにデザインされていることが示された。このような修復のあり方は話者の内的な認知過程によってのみ決定されるのではなく、具体的な相互行為の中で、話し手と聞き手の協同作業を通じて達成されていく。また、修復は情報の効率的な伝達にのみ貢献するのではなく、相互行為そのものを組織化するためのリソースとして、また、参与者のアイデンティティや相互の関係性を構築するためのリソースとしても機能しているのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語母語話者と非母語話者の接触場面会話における修復の諸相を実証的に分析し、修復という言語活動が協働的に構築される過程の一端を明確化したものである。本論文では理論的・方法論的な枠組みとして、協働的構築および会話分析を採用した。これにより、従来の第二言語習得研究においては指示的意味（referential meaning）の効果的な伝達という側面に矮小化されるきらいのあった修復を、会話参与者の間主観性を増大させ、相互行為を首尾よく達成させるためのリソースの一つとして位置づけることが可能になっている。

本論文は全７章で構成されており、第１章で序論として本論文の問題意識を述べた後、第２章で先行研究の概観と理論的立場の明確化、第３章で方法論の検討を行った。続く第４章から第６章においては、実際の分析結果が示されている。第７章は結論である。

第４章・第５章では、自己開始修復および他者開始修復を微視的に記述し、修復という活動の達成過程およびそれに影響を与えるコンテクストについて考察した。その結果、修復のあり方は話者個人の内的な認知過程によってのみ決定されるのではなく、話し手と聞き手の協同作業を通じ、非言語行動や話者間の関係性の保持といった言語外的な要素とも関連しながら達成されていくことが明らかになった。

第６章では、修復の遂行によって構築されるコンテクストについて、特に参与者のアイデンティティの問題を中心として考察した。本章の分析からは、修復が参与者の母語話者性・非母語話者性の前景化のみならず、両者の役割関係の転換や母語話者・非母語話者以外のアイデンティティの構築、常識的なカテゴリー付随活動に対する異議申し立てのためにも機能することが明らかになった。

本論文の知見は、修復という言語活動が非言語的・パラ言語的要素も含めて巧みにデザインされていること、相互行為という大きなコンテクストに埋め込まれていると同時に、相互行為を達成するためのリソースの一つでもあることを裏付けるものである。アイデンティティの重層性や発話の歴史性についての考察にはやや不十分な点がみられるものの、これらは今後の研究の発展可能性を示すものであり、本論文の優れた成果が損なわれるわけではない。よって、本審査委員会は本論文を博士（言語文化学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。